

〈小学校 図画工作科〉

創造活動に意欲的に取り組む授業の工夫

—— 中学年における「材料をもとにした造形活動」の学習を通して ——

豊見城村立豊見城小学校教諭 比 嘉 史 江

目 次

I 研究テーマ設定の理由	31
II 研究仮説	31
III 研究構想図	32
IV 研究内容	33
1 「創造活動に意欲的に取り組む」とは	33
2 意欲的な創造活動を展開するための授業の工夫	33
(1) 主体性を育てるための4つの指導過程のポイント	33
(2) 魅力ある題材の設定について	34
(3) 教師の支援について	34
① 創作意欲をかきたてる個に応じた教師の声かけとは	35
② 学習環境の場作りについて	35
(4) 評価の工夫	36
V 授業実践	37
1 題材名	37
2 題材設定の理由	37
3 題材の目標	37
4 指導計画	38
5 本時の指導計画	38
6 授業実践の考察	39
VI 研究の成果と今後の課題	40

創造活動に意欲的に取り組む授業の工夫

—— 中学年における「材料をもとにした造形活動」の学習を通して ——

豊見城村立豊見城小学校教諭 比 嘉 史 江

I 研究テーマ設定の理由

図画工作科の目標に「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な創造活動の基礎的な能力を育てるとともに表現の喜びを味わわせ豊かな情操を養う」とある。表現や製作をする目的は、造形的な創造活動を行うための基礎となる能力を身につけ、造形表現の楽しさおもしろさに浸りながら形や色で自分の思いを表し、伝え合う喜びを味わうところにある。また、それにより、子どもたちは心の豊かさや美しさを育んでいく。中学年における目標の一つに「材料から豊かな発想をしそれを生かす体験を深め、材料に対する感覚などを高めるとともに、見方や表し方に関心をもって工夫して表し、進んで造形活動ができるようにする」とある。本来子どもたちは、いろいろな材料を用いて物を作ることが好きである。さらに年齢が進むにつれ見た目や丈夫さなどを考慮に入れ、適切に材料を選択し、自分の意図しているものへと近づくように製作していこうとする傾向が見られる。

授業中子どもたちはいろいろ考えながら活動している。その中でいろいろなつぶやきがある。例えば「もっと速く回転させたいが思いどおりにいかない」「きれいに飾り付けをしたいがどうやったらよいかわからない」などである。このように子どもは自らこうしたいという思いを持って創造活動に臨む。しかし、実際には活動中壁にぶつかり、試行錯誤したり、回りに助けを求めたりして思い悩んでいる子も多い。中には、よいアイデアがでなくてあきらめてしまう子どもも出てくる。自分の思いを表現するために意欲的に取り組もうとしているのにその意欲が持続しないのである。このような技術面における問題以外に、目的意識がうすく創作意欲の少ない子や創造活動にあまり魅力を感じないのかももっと工夫すれば良くなるが適当に作品を仕上げてしまう子などもある。教師がこの子どもたちの様子をしっかりと把握し、解決策を導いていけたらもっとスムーズに創造活動を展開していくことができるのではないだろうか。

このようなことから、子どもが思いを表現しやすい魅力ある題材の設定、一人ひとりの可能性やよさを生かすような教師の支援のありかた、わかりやすい題材や教具の開発、子どものやる気を出させるような学習カードを工夫することによって自分の思いが表現しやすくなり、子どもたちの意欲を持続することができるのではないかと考えた。

そこで、中学年における「材料をもとにした造形活動」の学習を通して、いろいろ自分なりに想像をめぐらせながら創作していき、充実した創造活動ができる授業のありかたについての研究を深めることにした。そうすることにより、子どもたちは意欲的に創造活動に取り組むだろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説

4年生における「材料をもとにした造形活動」の授業において、題材や教具、学習カードを工夫し、教師が適切に支援することによって、自分の思いが表現しやすくなり、意欲的に創造活動に取り組むようになるであろう。

Ⅲ 研究構想図

これからの学力観に立つ教育

子どもたち一人ひとりが主体的によりよく生きていく資質
や能力を自ら高めたり獲得したりして、豊かな人間として生
きていくこと

図画工作科の目標



表現及び鑑賞の活動を通して、造形活動の基礎的な能力を
育てるとともに表現の喜びを味わわせ、豊かな情操を養う

研究テーマ



創造活動に意欲的に取り組む授業の工夫
ー中学年における「材料をもとにした造形活動」の学習を通してー



研究仮説

4年生における「材料をもとにした造形活動」の授業において題材・教具、
学習カードを工夫し、教師が適切に支援することによって、自分の思いが表現
しやすくなり、意欲的に創造活動に取り組むようになるであろう



研究内容

1、「創造活動に意欲的に取り
組む」とは

2、意欲的な創造活動を展開するための
授業の工夫

- (1) 主体性を育てるための4つのポイント
- (2) 魅力ある題材の設定について
- (3) 教師の支援
 - ①活動意欲をかきたてる教師の声かけ
 - ②学習環境の場作り
- (4) 評価の工夫



題材名 ざいりょうは生きている
「新しゅの生き物」の授業実践



めざす子ども像

創造活動に意欲的に取り組んでいる子

IV 研究内容

1 「創造活動に意欲的に取り組む」とは

子どもたちが社会の変化に対応し、心豊かに主体的に生きていくためには自ら学ぶ意欲とともに、人間としての生き方について自分の考えをもつようにする必要がある。すなわち、進んで学ぶ意欲をもち、主体的で創造的な学習の仕方を身につけ、新たな発想や行為を生みだすもとなる論理的な思考力や想像力、直感力などの創造性の基礎を培わなければならない。これまでの教育においては、教師中心で子どもたちは受け身のかたちで知識や技術などを教え込まれるという傾向が強かった。しかし、これからの学力観に立つ教育においては、子どもが自ら考え、判断し、表現や行動ができる主体的な能力や創造性の基礎を培うことが求められている。子どもたちは、本来、さまざまな可能性を内に秘め、よりよく生きたい、向上したいと願っている。それが触発され、自分のもてる思考力、判断力、表現力、感覚などを発揮したり、表現したりして、その資質や能力などを高めたりする。また、自分の思いやよさ、もてるさまざまな可能性などが生かされることによって、楽しさや快さ、喜びの感情を味わうことができる。それが、内発的な意欲となり、主体性を生み、自ら学ぶ最も大切な意欲や態度、能力などを高めていくことになる。教師は、この内発的な学習意欲を大切にし、子ども一人ひとりの思いやよさ、可能性を発揮させるような学習指導を工夫する必要がある。特に図画工作科においては、子ども一人ひとりの望ましい表現欲求や創造欲求などにもとづいた造形的な創造活動によって、学習活動が展開されることに特性がある。すなわち、子ども一人一人の内発的な意欲によって始まり、その表現欲求を望ましい方向において高め、より豊かな創造表現に向かうよう学習が展開されなければならない。

「子どもが創造活動に意欲的に取り組んでいる姿」とは主体的に創造活動しているということであり、また、それを心から楽しんでいると同時に活動が持続しているということである。具体的にいうと次のような子どもの姿が考えられる。

- ・自分の作品にむかい、自分の思いを膨らませながら、わき目もふらず創作している。
- ・アイデアにゆきづまったり、何かを知りたいとき、疑問に思ったときなど教師や友だちに質問したり友だちの作品を参考にしたりして自ら解決していこうという態度がみられる。
- ・ぼんやりしたり、私語、無意味な立ち歩き、手遊びなどをしていない。
- ・自分の作品を教師や友だちに自ら説明したり、見せてくれたりする。
- ・友だちの作品や創作する様子を興味をもってみている。

などである。

2 意欲的な創造活動を展開するための授業の工夫

(1) 主体性を育てるための4つの指導過程のポイント

「表現の主体者は子どもである。授業は子どもの主体的な活動が展開できるようにしなければならない。そのためには、表現がどのようなプロセスを通して行われるかを知り、学習の流れにそって指導することが大切である。子どもが主体的に取り組む学習の流れには、自己発動、自己決定、自己活動、自己評価の4つの段階がある。」と岡田惣吾氏は言っている。プロセスを大切にする授業とは、りっぱな作品を作るために作品作りに集中するというような「結果主義」の授業ではない。もちろん作品も大切であるが、作品が生まれるまでの子どもの思いを大切に、表現活動が行われていくことが、プロセスを大切にした授業である。岡田惣吾氏によれば4つのプロセスにおけるポイントとは次のことである。

◎第1の節（自己発動）

かいたり、つくったりする表現の活動は、人に強制されるものではなく、自由で自発的なものである。したがって、学習の導入段階で、「おもしろそうだ」「やってみたい」と表現への興味や関心をもたせ、意欲づけることが第1の指導のポイントである。

◎第2の節（自己決定）

表現への意欲づけが行われると、次は何をかくか、何をつくるかを自分で決めさせることが第2の指導のポイントである。表現の思いが明確になれば学習のめあても自分で決められ、学習は課題解決の学習となり、主体的な取り組みが期待できる。

◎第3の節（自己活動）

表現は自分の思いの表現であるからよりよいものをつくりだすためには、自分のもっている全知全能を使って取り組む姿勢が大切である。思いをどのように表現するかの構想・構成や表現技法の工夫などの支援が第3のポイントである。

◎第4の節（自己評価）

図工科の表現の学習は結果的に作品ができあがる。この場合には、「これでよいか」、「直してみよう」と自己修正することが第4の指導のポイントとなる。自己評価はよりよいものを作り出すとともに、表現の喜びにも深くかかわってくる。

(2) 魅力ある題材の設定について

学習指導の場面では、題材が触媒となり創造活動が行われる。要するに教師の願いと子どもの創造活動への期待を仲立ちするのが題材なのである。したがって、子どものみずみずしい感性や造形性を踏まえ、一人ひとりのよさや可能性が展開できる題材が望まれる。すなわち教師は、子どもの興味・関心、主体性などから個々の子どもに今どんな題材を設定したらよいかを常に配慮することが問われる。また、これからの学力観に立つ図画工作の学力として「造形への関心・意欲・態度」、「発想や構想の能力」、「創造的な技能」、「鑑賞の能力」が示されているが、題材の設定にあたっては、これらの創造的な技能、表現、態度の育成の配慮が欠かせない。よって、題材を設定するときは、子どもの主体的な造形意欲が喚起され、一人ひとりの子どもが生き、教科の目標やこれからの学力観なども十分に達成されるものである必要がある。以下は、題材設定をするための4つの視点である。

①一人ひとりの子どもにとって価値のある魅力的な題材

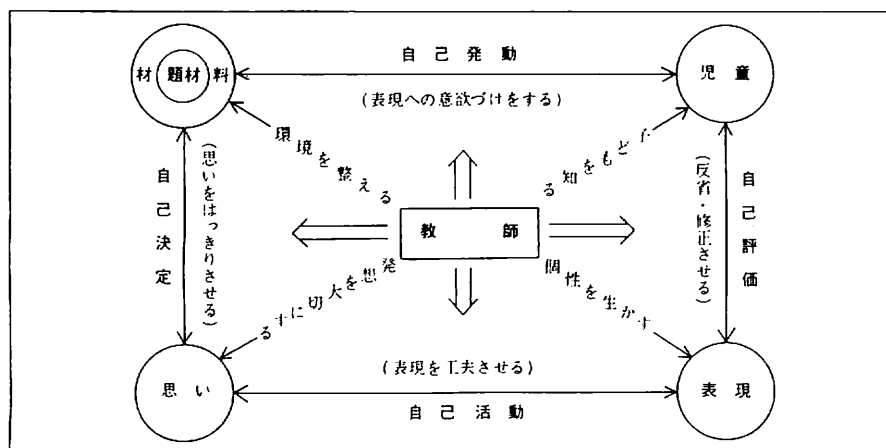
②選択性やひろがりのある題材

③創造的な技能が発揮できる題材

④家庭や地域との関連性を考慮した題材

(3) 教師の支援について

教師は、一人ひとりの子どもが豊かに自己実現が可能となるように、子どもの側に立ち、造形活動に支援的にかかわることが必要である。どの子どもにも活動への自発性が存在しているが、それは、一人ひとりの子どもの興味、関心、こだわり等から発する場合が多く、そのささやかなつぶやきや表情に教師が感応することにより、子どもの創造活動が大きく広がることもある。岡田惣吾氏によると4つのプロセスの段階での教師の支援について、次のように表している。



〈図1 岡田惣吾氏による4つのプロセスにおける教師の支援〉

4つの段階においては次のような助言が考えられる。

- ・自己発動 ……… 意欲づけを目的としたもの
- ・自己決定 ……… 思いがはっきりし、イメージが定着し、学習課題が設定できるようなもの
- ・自己活動 ……… 学習態度、表現の工夫、表現への自信などに関する助言
- ・自己評価 ……… 作品の見直しをして修正するための助言

また、支援とは教師の言葉かけのみではなく、子どもが活動しやすいように学習環境を整えてあげることも含まれる。学習環境は、子どもの創造活動の発想を呼び起こすとともに活発に創造活動を展開することができるように構成することが大切である。学習しやすい環境の設定は、学習活動を高めるだけでなく学習意欲にも影響してくる。

よって、教師の支援として本研究の中で次のようなことを取り入れることにした。

- ① 創作意欲をかきたてる教師の声かけ
- ② 学習環境の場作り

① 創作意欲をかきたてる個に応じた教師の声かけとは

- ア がんばっている子へのほめ言葉（意欲 発想力 想像力 創造力 工夫 態度）
- イ 表現意欲が足りない子への声かけ（アイディアにつまんでいる子 悩んでいる子 ぼんやりしている子 集中していない子）
- ウ 技能的な面での援助の声かけ（用具や材料の扱い）
- エ もっとよくなりそうな子への声かけ

② 学習環境の場作り（活動しやすい場）について

ア 広いスペースの確保

子どもたちが活動しやすいように作業空間を広くとる。また、のこぎりなどの安全面に気をつけないてはならない用具の使用場所は教師の目がゆきとどこやすいように一か所に固定した。

イ 材料・用具コーナーの設置

〈写真1 材料コーナー〉

材料や用具は、表現方法を規制することになるので、可能な限り、子どもが表現の思いや意図に合わせてふさわしいものを選ぶことができる配慮が必要である。自分でそろえた材料だけでは少なくてイメージが膨らみにくい。よって、多様な材料にふれさせ、不足を補い、イメージしやすくするため、材質ごとに区分けして材料コーナーを設けた。また、用具も子どもの手持ち以外に必要と思われるものを教師が用意しておくようにした。（のこぎり きり 段ボールカッター 発泡スチロールカッター 木工用万能はさみ 小刀 金づち ペンチ セロテープ 針金）



ウ イメージ作りヒントコーナーの設置

アイディアにつまった子やもっとイメージを膨らませたい子のために絵本や図鑑をたくさん用意しイメージ作りを助けるためヒントコーナーを設けた。

エ 接着剤おためしコーナー

各材質の組み合わせによる接着の際に必要なと思われる接着剤をすべて用意し、その場で子どもが使用できるようにスペースをとって設置しておく。「発泡スチロール用」「ビニール用」などの記名をして分かりやすいように区分けしておく。「接着



〈写真2 イメージ作りヒントコーナー〉

剤早見表」(写真)をおためしコーナーの前に掲示しておき、どの接着剤を使えばよいのか子どもたち自身で選べるようにした。また、ホットボンドや瞬間接着剤は安全指導を十分に行うようにした。

オ 掲示用資料

用具の活用の仕方の資料を作業しながら参考にできるように掲示した。

カ 教具の工夫

(ア) 紙芝居での導入

導入で紙芝居を利用して、そのお話に自分の作った新しゅの生き物を登場させることを想定して作品を創作させる。創作後は生き物の名前、性格、住んでいるところや趣味などを楽しく想像させながらお話の続きを考えさせ最後の鑑賞会で発表させる。

(イ) 試作品の活用

材料のどういう特徴を生かして作っているかを分かりやすくするため実際に教師が作品を作ってみて参考にさせる。

(ウ) 接着剤早見表の活用

多種多様の質の違う材料どうしの接着・接合が生じてくるので、どの接着剤を使えばよいかわかりやすくする必要がある。ここでは、自分で接着剤を選ぶことができるように材質による組み合わせを分かりやすく表にして接着剤を示した。

(4) 評価の工夫

評価は、子どもの学習活動をより効果的にするための学習指導の一環として取り入れ、評価をしていくことにより、子ども一人ひとりのよさや可能性、学習意欲を高めるようにしていくようにする。子ども一人ひとりの可能性やよさを見とり支援する指導と、子どもの様々な表現のよさに共感する評価は常に一体のものであり、その具現化によって一人ひとりの子どもの多様で豊かな表現が可能となる。本研究では、教師の評価の他に子どもの創作意欲を起こさせる手立てとして、学習カードを工夫し活用することにした。

① 教師の評価の方法は、毎時間の評価計画に従って評価をするが、子どものよさや変容が分かるようにその都度記録していく。

② 学習カードを利用して「自己評価」「相互評価」を取り入れる。自己評価は自分のよさやつまずき、創作状況を把握するために、相互評価はお互いのよさ、つまずきを見つけるためにを行う。

ア 自分の活動をふり返り目的を自覚させるためのカード

	使用する目的	実施する時期
材料カード	自分でどれだけどんな材料を集めたか自覚する	事前
新しゅの生き物のイメージ図	イメージがわからず困っている子への手立て	1時
めあての反省カード	毎時間のめあてが守れたか自己反省する	毎時
創作途中カード	創作状況をふり返らせよさ、つまずき、はかどり具合を知る	3時
感想カード	授業の感想と次時の目標を書かせ意欲づけをする	毎時

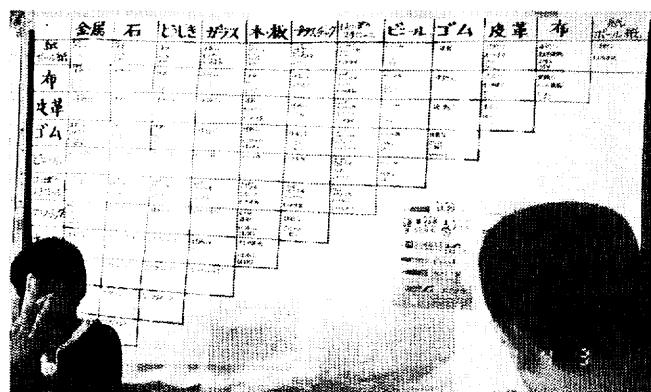
イ 自分や友だちの作品のよさを見つけるためのカード

	使用する目的	実施する時期
友だちへのアドバイスカード	自他の作品を見合うことにより良さやつまずきに気づき、よりよくしていこうという意欲をはかる	2～4時(授業中・休み時間)
新しゅの生き物紹介カード	自分の作品に愛着をもたせる	5時
お話の続きカード		
自分の作品の鑑賞カード(1)		
友だちの作品の鑑賞カード(2)	友だちの作品の良さを見つける	6時

ウ 想像力を高めるためのカード

想像力テスト(1)(2)(3)	違和感なく空想の世界に入り、想像力を高めるため	事前
-----------------	-------------------------	----

〈写真3 接着剤早見表〉



V 授業実践

1 題材名 ざいりょうは生きている「新しゅの生き物」

2 題材設定の理由

(1) 題材観

本題材は、学習指導要領A表現(1)のイ「身近な材料の形や色などの特徴を生かし、切ったり、組み合わせたり、結合させたりして新しい形をつくとともに、その形から発想してたのしい形をつくるなどの造形遊びをすること」を受けたものである。ここでは、廃品や身の回りにある物を利用して子どものもつ物に対するアニミズムを生かし、自分独自で考えた新しゅの生き物を作っていくことにより、材料の形や色や質感等の特徴をとらえると同時に、楽しみながらそれを組み合わせて生じる形の意外さやおもしろさに気づくことをねらいとしている。ありきたりの物ではなく、想像力を働かしながら新しい物を生み出していくことにより、自分らしさを表現しやすいのではないかと思い本題材を設定した。

(2) 児童観 (省略)

(3) 指導観

授業に入る3週間ほど前に声かけして材料を自分で集めさせる。この材料を見てどんな物を作るかイメージ図を簡単にかかせ、イメージ化を図る。多種多様な材料の加工が行われる可能性が出てくるため、実際に創作に入る前に基礎基本として道具の使い方、切断、接着・接合の仕方を知らせ、材料の種類ごとの適切な加工の仕方も指導する。この時、安全面には十分気をつけさせたい。多様な材料を加工するため、いろいろな道具が必要となってくるが、必要と思われる道具をきちんと教師側で補ってやることにより、創作活動をスムーズに運ばる。多様な材料の特徴に目を向けさせ、作りながら自由に発想をしさらにイメージを広げさせていきたい。イメージを広げるための手立てとして、子どもの手持ち以外に多種類の材料を教師が用意しておくようにし、友達同士での材料の交換も取り入れる。またイメージを膨らませるためのヒントとなるように「イメージ作りヒントコーナー」を設け、絵本や図鑑をふんだんに活用させる。また、紙芝居で導入し、話の中に新しゅの生き物を登場させることにより、空想の世界に引き込ませ、楽しさを味わわせると同時に想像力を高めさせていきたい。試作品で材料の特徴の生かし方を示すだけでなく、創作の途中で友達同士で作品を見せ合うことにより、お互いのよさを見つけさせると同時に自分のよさも分かってもらう場を設けていくようにする。自分が今どういう目的で何をすべきなのかということを分からせるために学習カードを要所要所で取り入れ、創作意欲をかき立てさせる。アイディアの出ない子、悩んでいる子、ぼんやりしている子、立ち歩いたりして集中していない子への声かけやもっと工夫したらよくなりそうな子へのアドバイス、工夫してがんばっている子へのほめ言葉などを教師の適切な支援として取り入れていきたい。作品が出来上がったら、紙芝居のお話の続きを考えさせ、自分の作品を紹介しながら発表させたい。この時に自分の作品のよいところや工夫したところ、苦労したところなどを発表させ、友達の発表を聞くことにより、作品のよさをお互いに見つけ合うことだけでなく、発表するときの態度のよさも見つけさせていきたい。

3 題材の目標

- (1) 自分の思いを広げながら、ものを作る楽しみ、その喜びを味わおうとする。(関心・意欲・態度)
- (2) 活動しながら自分の思いをこめた作品を構想する。(発想や構想)
- (3) 材料の特徴を生かし、加工の仕方や接着・接合の仕方を工夫して自分なりの表現方法で作品を作る。
(創造的な技能)
- (4) 友達の作品の発想や材料の生かし方、表し方の工夫などそのよさを味わう。(鑑賞)

4 指導計画

次	時	過程	ね ら い	学 習 内 容	そ の 他
事前		自己発動	・予告を聞き、身の回りからいろいろな材料を積極的に集める	①予告を聞き、身の回りからいろいろな材料を集める	できるだけ多種多様な材料を集めるようにさせる
一次	1	自己決定	・材料からイメージすることができる	①紙芝居を見る ②参考作品を見てどんな材料を使いどんな方法で作ったのか話し合う ③材料からイメージしイメージ図をかく	持参した材料からイメージさせる
二次	2 3 4 (本時)	自己活動	・材料の特徴を生かし組み合わせてみながら新しゅの生き物のイメージを広げることができいろいろな材料の加工法や接着・接合の仕方、用具の使い方がわかりそれを考えながら作ることができる	①材料の特徴を生かし組み合わせてみながら、新しゅの生き物を作る ②種類ごとの材料の加工法や接着・接合の仕方、用具の使い方がわかりそれを考えながら作ることができる	できるだけ多様な材料に触れさせる (材料コーナー・友達と交換)
三次	5	自己評価	・出来上がった作品の性格や住んでいるところなどを楽しんで考えることができる	①自分の作った新しゅの生き物の特徴を考えお話の続きを書く	自分の作品のよさに気づかせる
次	6		・自分の作品と友達の作品のよさを見つけることができる	①作品を紹介しお話の続きを発表する	友達の作品のよさに気づかせる

5 本時の指導計画

(1) 題材名 ざいりょうは生きている「新しゅの生き物」

(2) 本時の指導目標

材料の特徴を生かし、作りながらイメージを広げ、意欲的に創造活動することができる。

(3) 授業仮説

創作する過程において、適切な支援（場の設定・声かけ）をし、学習カードを利用することにより、子どもが意欲的に創造活動に取り組むようになるであろう。

(4) 準備する物

児童：材料 接着剤 はさみ のこぎり きり

教師：のこぎり 段ボールカッター 木工用万能はさみ 金づち きり 発泡スチロールカッター
ペンチ 接着剤 セロテープ ビニールテープ 釘 材料の予備 児童用参考資料（図鑑 絵本等） 掲示用資料（接着表、加工の仕方、道具の使い方など） 見本用試作 軍手

(5) 展開

時	過程	学 習 活 動	教 師 の 支 援	評 価
3分	思いをもつ	材料の特徴を生かして新しゅの生き物を作ることを確認する めあてを読む	見本を見せながら再確認する 材料の形や色や手ざわりを生かして新しゅの生き物をがんばって作ろう	材料の特徴を生かして自分なりに表現している(発想・構想) 材料の特徴を生かし多様な材料を使って積極的に表現しようと試みている (関・意・態)
35分	思いを表現する	作り始める	・困っていそうな子、声かけを必要な子を援助する ・様子を見て必要ならば用具の使い方を再確認する ・友達の作品の工夫している点を見つけさせ意欲を出させる ・工夫している子を取り上げてほめる	
7分	ふり返る	めあてを守れたか確認する 次回予告を書く 後片付けをする	・自分の活動をふり返らせて守れたか確認させる(学習カード) ・みんなが協力して手早く片付けるようにさせる	

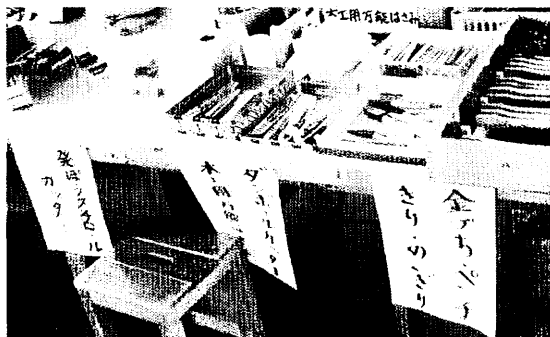
6 授業実践の考察

適切な支援について

〈場の設定〉

- ・ 多種多様な材料を用意することにより子どもの創作意欲をかきたてることができ、喜んで活動に取り組んでいた。
- ・ 広いスペースを確保することにより、のびのびと活動することができた。
- ・ 「用具コーナー」を設け、用具を補うことにより、子どもたちの創作活動を促すことができた。
- ・ 接着剤を使うときに子どもたちは、「接着剤早見表」を活用しおためしコーナーで自主的に接着剤を使用していた。接着剤が乾くまでセロテープで仮に押さえておく、おもしろをのせておくなどの工夫も見られた。接着剤使用が難しいと思われる子には、万能ボンド（ホットボンド）を使わせると簡単に接着することができた。このように接着段階で創作意欲をなくしてしまいそうな子は、ホットボンドを使わせることによって、喜んで学習に取り組ませることができた。

〈写真5 用具コーナー〉



〈声かけ・学習カード〉

- ・ ぼんやりして何から手をつけていいかわからない子へ声かけをしたり、「創作途中カード」を見せることにより、自分の行動の目的を発見させ学習意欲を促すことができた。
- ・ 用具を適切に選ぶことのできない子や使い方がうまくない子に対しては教師が支援することにより、よりよい活動をすることができた。
- ・ 子どもたちは友だちの作品を見て気づいたときにいつでも「アドバイスカード」（図2参照）を手渡していた。（休み時間・授業時間・放課後など）本授業でも渡された子は自分の作品についてコメントされたその紙をととても興味をもって見ていた。そして、「～した方がいいよ」とアドバイスされたことをすぐ実行に移した。例えば、A子から「目にも色をつけるといいよ」というアドバイスをうけたB子はすぐにマジックで目に色をぬり始めた。また、「ビーズをいれるのがじょうずだねようふくをつけるとかわいいよ」と友だちのよいところをほめながらアドバイスする子もいて、カードをもらった子はたいへん嬉しそうであった。みんな、カードをあげるのももらうのも嬉しいらしくて男女の分けへだてなく、遊び感覚で渡す子が多かった。
- ・ 「感想カード」に書きこまれた「今日がんばりたいこと」や教師のコメントは子どもの意欲につながった。

〈図2 アドバイスカード〉

友だちへのアドバイスカード	
ひろのぶ	さん(くん)へ😊ここをこうするともっとよくなるよ!!
キッチンペーパーのしを立てやすくした方がいい。	
～がんばってね～	さおり
	より

〈図4 感想カード〉

〈図3 創作途中カード〉

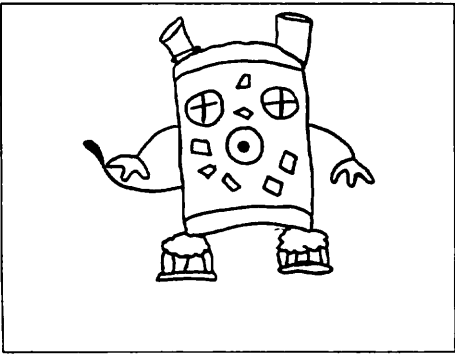
学習カード3

4年 2組 氏名 大城 のぞみ

○今どんな新しいの生き物を作っていますか？
絵で解説してみよう。

名前は ちからくん

性格は ちからもちでいはい人ぽ。



(1) 工夫したところは？
手をはりがねでつくったところ

感想カード

4年2組 3番 氏名 大見 謝 恒斗

月日	計画	今日の感想	つぎがんばりたいこと
6 / 20	・紙芝居を見て イメージ図をかく	イメージ図をかいたのをみんだ	かっこいいものをつくること がんばる
6 / 24	・作品を作る	イメージ図をかいたものを3つにわけてみる いい。いーんじよ。	できた2つ すげえ。
6 / 26	・作品を作る	ロボットみたいになっちゃった。	めをやること ロボットみたいになる
6 / 28	・作品を作る	1つでさあがたの1つを2つにわけてみる もう1つをつくる うと思った。	めをやること きんたの1つ にめをやること
7 / 7	・お話しを考える	なめなめなめ なめなめ	大きな声でしゃべる めした がんばる
7 / 9	・発表会をする	せんちょうした	

VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 題材・教具、学習カードを工夫しうまく取り入れることにより、子どもが楽しんで意欲的に学習に参加していた
- (2) 学習環境を整えることにより、スムーズな創造活動ができ、自主的に取り組むことができた。
- (3) 教師が声かけをすることにより、意欲が持続し、次の活動へうまくつながった。

2 課題

個に応じた声かけが充分とはいえず、活動が遅れがちの子が何人かいたので、今後もさらに研究を重ね、子どもたちが自分のよさや可能性を発揮できるような教師の支援のあり方を考えていきたい。

〈主な参考文献〉

文部省	『新しい学力観に立つ図画工作の学習指導の創造』	日本文教	1995年
文部省	『新しい学力観に立つ図画工作の授業の工夫』	日本文教	1995年
文部省	『指導計画の作成と学習指導』	日本文教	1991年
西野範夫・水島尚喜編著			
	『新しい学力観に立つ授業展開のポイント』	東洋館	1995年
岡田惣吾	『だれでもできる図画工作の授業』	日本文教	1995年
藤原久雄	『一人ひとりのよさを生かす評価』	明治図書	1993年
北尾倫彦	『よさを発見する指導と評価』	ぎょうせい	1996年